

説教

— その芸能(話芸)的価値について —

33期生

I テーマ設定の理由

昨年、ふとしたきっかけで、説教の魅力に取りつかれ研究したのだが、奥義をつかめずに終わってしまった。仏教という、難解に思われるがちなものを、面白く、又、わかりやすく話す説教には、日本語独特の味がある。説教を通じて、言葉の不可思議さを追い、又、その秘密を探るため、調べることにした。

II 研究方法

- [1] まず、説教の内容を把握するため、仏教について文献を参考にまとめる。さらにそこから説教の発展を見るため、各宗派別にわけて詳細に調べる。
観点…①宗派の特徴 ②布教の方法 ③政治とのかかわりあい、及び社会的背景
- [2] 説教そのものの意味を考え、説教が話芸として発展するに至ってからを時代を追って調べる。そして、その表現法などが、現代の芸能にどのように影響してきているかを考える。
- [3] 実際に説教と呼ばれるものを聞き歩き、テープに録音するなどして、直接に説教の技法などを分析してみる。(昨年の研究結果から抜粋)
- [4] 文献を参考に、話芸としての説教の特徴をまとめ、考察する。

III 研究結果

[1] 仏教

一般には次のように定義されている。

「世界の大宗教の一。前五世紀の初めにインドのガンジス川中流地方に興った。仏陀釈迦牟尼の説法に基づき、人間の苦惱の解決の道を教える。修行に専心する出家教団の他に在家信者たちも多かった。阿育王の入信によってインド全土から国外へも拡まり、一世紀ごろから東アジアの諸方に及んで現在に至り、最近では欧米にも知られている。すでにインドにおいて大乗・小乗の区分が生じたが、中国や日本では風土的特色を加味した種々の宗派が発生、発展した。」

日本には538(欽明天皇7)年に百濟から伝わった。それは聖徳太子(574~622)によって基礎が固められ、奈良仏教・平安仏教を経て、鎌倉仏教に至って民衆の仏教として定着した。すなわち、浄土教や禅宗・日蓮宗などは、武士階級や農民・商人の宗教であり、前時代の貴族中心の仏教と異なる。この鎌倉時代までに定着した仏教が現代の日本仏教となっている。仏教は日本にはいると、それ以前の日本人の宗教心と習合し、融合して日本仏教となっている。日本仏教が呪術的であり、現世利益的であるのはそのためである。さらに日本仏教は、建築や彫

刻・絵画・文芸などにすぐれた文化を生み、芸術仏教として発展した点に特色がある。説教も例外ではない。

さて、説教は、布教の対象が変わると形まで変わるものである。つまり、説教師自身がその雰囲気を巧みにとらえて話すわけで、そういう意味で、宗派によって説教にも違いが出てくる。次に示す表は、各々の宗派内の仏教活動をまとめたものである。

	天台宗	真言宗	浄土宗	浄土真宗	日蓮宗	禪宗
創始者	最澄	空海	法然	親鸞	日蓮	曹洞／道元 臨濟／栄西
特徴	従来通り 来世利益的 複雑宗教 大乗戒の権威	法力をもつ ＊即身成仏 の主張	極楽往生 口唱念佛	自然を重じる 悪人正機説 他力本願 口唱念佛	口唱念佛 他宗派に批判的 的 国粹主義的	座禅
布教方法	貴族対象 總本山所持	貴族対象 祈禱	農民・武士対象 辻説法	生きている人への救済 (農民) 辻説法	商人階級対象	武士対象
社会背景	国家守護の手段に仏教使用	国家守護の手段に仏教使用	末法思想による社会不安 創始者の島流し	創始者の島流し		

説教は、現代にみると浄土宗・浄土真宗で発展してきた。それは、対象が農民であるため、文書で布教することが難しく、口語で布教する辻説法的なものが多かったからだ。こうして説教が布教の中心になってくると、いかにして聴者に関心を持たせ、話に引きつけるかが問題となってくるわけで、その意味で説教は芸能としても大きく前進してきたのである。

[2] 説教

— 本来の姿 —

「説教」というのは、仏教で經典や教義を説いて民衆を教化する行為をさす。わが国の説教は時と場所に応じて、説經・説法・説戒・唱導・法談・讚歎・勧化・談義・講釈・講談・演説・講演・講筵・開導・化導・法座・御座・教導・法話・布教・伝導などさまざまな異称をもって歴史的展開をとげたが、これは表白体(きまつた形式に基づく文章が用意され、しかもそこには厳格な修辞法が要求され、流麗な文章が作られることをもって上等とされたもの。文学的表現が多様)よりも演説体に重点を置いた説教の多種多様な形態を物語っている。

古来わが国では、宗教・生活・娯楽(芸能・遊び)を一体とする生活構造が確立していた。少なくとも前近代における日本人の生活には法芸一如の姿勢が樹立されていた。したがって、現代人の眼には「遊び」として映る宗教行事も、昔の日本人にとっては決して単純な「遊び」ではなかった。間違いなく生活であったのである。寺社の縁日・法要・開帳・祭礼や盂蘭盆の

行事に参加することは、まさに宗教・生活・娯楽を一体とする日本人の庶民生活そのものであった。

寺院や説教所で行われた「お説教」も庶民層の生活意識を典型的に示すもので、説教は仏教の積極的な布教であると同時に、民衆の娯楽的要求を十分に受けとめるすぐれた芸能(話芸)でもあった。節談説教(節付説教。ことばに節《抑揚》をつけ、洗練された美声とゼスチャーをもって演技的表出をとりながら、聴衆の感覚に訴える詩的、劇的な『情念の説教』)は、まさに仏教と芸能(娯楽)を一つにしたもので、それを聴聞する人々は、説教師の巧妙な話芸にうっとりとして楽しみながらも一途に浄土への往生を希求したのであった。

ここでもう少し節談説教に触れておこう。節談説教というのは、仏教者にとって古びた昔のお説教にすぎないが、淨瑠璃・落語・講談・浪花節など日本の「語る芸」「話す芸」のあらゆる要素を包含し、涙と笑いをないまぜにした独特のものなのである。

— 説教の歴史 —

仏教伝来後、一千何百年にわたって行われてきた説教者たちの弁舌は、かつて日本の雄弁術を代表したものであり、話芸などの芸能に大きく影響を及ぼしている。

淨瑠璃・落語・講談・浪曲のような、わが国独特の「語る芸」「話す芸」の成立を考える場合には、

(1) 説話文学

(2) 喰職(話すことをもって業とし、話すことをもって自己の人生を意義あらわした人たち。はなしのもの)

(3) 説教の歴史

の三系列をたどらねばならないが、このうち特に(3)について考えてみることにしよう。

年表に整理し、芸能としての本流を探ってみたのが次である。

紀元前	釈尊の「悟後の瞑想」から説教発する。
598	文献に残るわが国最初の説教・厩戸皇子(聖德太子)の勝鬘經講。
平安	説教師が話芸のタレントとしてスターダムにのしあがる。
鎌倉	仏教の祖師(法然・親鸞・日蓮など)によって通俗説教発展の基盤が作られる。經典講釈による説教、節談説教、曼茶羅講説などの絵解説が発生、発展する安居院流と三井寺派が弁舌の家元的存在として並立する。
江戸	徳川幕府の保護によって仏教が日本人の生活に完全に浸透する。仏教的芸能衰行、自然に民間行事となる。(説教淨瑠璃・盆踊り・落語など)
明治元	神仏分離、神道主義政策により、仏教界の布教が困難となる。
大正	マスコミの発達にともない、しだいに衰退
昭和	落語・浪曲などの芸能にのみうけつがれ、仏教界での説教価値は大いに下落した。

(3) 話芸の秘法

今、在座のわれわれが、三界六道生死輪転の迷の山路に踏み迷い、道は八万四千と分れてある。妄念煩惱の雨は降る、善根苦徳の傘はなし、罪業深重の荷物は重く、無明長夜の闇の夜に、智恵の灯火持てはおらず、このまま死なば狼狽でない、牛頭馬頭阿房羅刹(ゴズメズアボウラセツ)の手にかかり、泣く泣く三途に沈まにゃならぬ此奴を、向こうの方から光明無量の提灯には、機法一体の定紋につけ、大音あげて サア親が迎えに来たぞー
(以下略)

上は、近世から近代にかけて一世をふうびした浄土真宗における節談説教の一節である。声を出して読んでみると明確にわかるのだが、この説教には七五調を旨とした特異な雄弁の秘がある。日本語の特質を生かし、日本人に最も適した七五調を基にしたリズミカルな美しい表現、宗義を踏まえ、和諧や法語を巧みに導入し、見事な美声による節まわしで聴衆の心の中へ入りこんでいくフィーリング説教の卓抜さを備えているのである。

多くの説教者はすこぶる洗練された弁舌をもって大衆の教養を引き上げたり、信者の趣味や風習に相応した口調で説教した。それは、けっして現代人が考えるような教訓的、説諭的なものばかりではなかった。節談による説教は、ひとり文句が美しいというだけではなく、その表現における演技的表出の力は、随行制度や合宿訓練による師資相承の方法できびしく述べたのであった。

(1) 説教の型

古い説教の型に「三周説法」というものがあったが、この三周（法説・譬喻・因縁）を応用したものを中味にして、頭に講題を置き、末尾に結勧（結弁）を置く「説教の五段法」は、江戸時代に真宗で創造され、固定した型として伝承された。

《五段法》

一、講題

これから説こうとする一席の話のテーマとして経論・祖釈（経典や法語）の一節を箇をつけて感銘深く読みあげる。

二、法説

講題の法義を今少しありやすく解説することをいう。

三、譬喻

講題・法説をいっそうわかりやすくするために譬喩談（たとえ話）ができるだけ興味深く話すことをいう。

四、因縁

講題・法説を証明するための事例をあげる因縁談をさす。

五、結勧（結弁）

結び。聴衆に「安心」を与え、今後の話の要諦をまとめてひきしめる。

要するに講題（テーマ）が切り出しとなり、法説を導入部としてマクラを振り、譬喻・因

縁を中心とし、結勧をもって結ぶという三部に分ける。これを「はじめしんみり（講題・法説）、なかオカシク（譬喻・因縁）、おわりトウトク（尊く=結勧）」とも伝承した。これはまさに洗練された話法の構成であり、日本の雄弁術の伝承を知る上でも注目しなければならない。

説教の型については、他に大まかに二つの分類ができる。「呼び説教」、「因縁譬喻説教」の二つだが、ここでは略しておく。

(2) 説教の技巧

次のような独特的の口調がある。

地……一般的な世間話、時候の挨拶、物事の説明などに用いるものであり、ゆっくりと語尾を強くはねる。

棒引……抑揚をつけずに、高く、大きく、直面に、あたかも棒のごとくゆっくりと話す。

位引……聖教の文を拝読するときの莊重な調子

力味……「地」に力を入れて「棒引」と比較してテンポの早い調子

威張り……「御文」の初めの一句を力むことをいう。

乗り……弁舌に油が乗って快調のとき、あるいは怒涛のごとく、あるいは鉄車のとどろくがごとく、長く、強く、激烈に弁じたてる口調

拍子……甲拍子・乙拍子とあり、前者は持ち前の発声で第一句を上からいい第二句を下からと交互に声を出す技巧をいう。後者はしみじみと人情を語る場合に用いる技巧であり、一句一句を上から、下から交互に述べるのである。

他に、「セリ」「落ち」「当り」「ハネ」などもある。説教師がこれほど多くの技巧を習得し、使いさばいていることに非常に驚きを感じた。

(3) 現代説教における話芸

(1)(2)で調べたことを参考にして、実際に聞いた説教を分析してみた。

夫れ一切衆生 三悪道（地獄道・餓鬼道・畜生道）をのがれて 人間に生ること
大きいなるよろこびなり。

身はいやしくとも 畜生におとらんや。家まずしくとも 餓鬼にはまさるべし。心
に思うことかなはずとも 地獄の苦しみにはくらぶべくもあらず。（以下略）

上は和泉市にある松尾寺で頂いた、説教の原稿のようなものである。現代文に訳すと、「すべての生き物が 三悪道をのがれて人間に生まれることは大きな喜びである。

地位や身分が低くても 人にかわれて生きている獣や魚達にはおとりはしない。家が貧しくても 餓鬼道におちた亡者たちよりましてある。心に思っていることがかなわなくても、地獄の苦しみに比べればたあいないことだ」となる。二つを見比べながら、特徴を考えてみよう。

・リズム — 助詞はリズムをそろえるためか、除いたところが多い。

「…なり」「…べし」の助動詞で文が終わっている。

- ・法語の巧みな導入が見られる。
 - ・対句表現を多様し、たたみかけるように話をすすめ、後半をもりあげる配慮がなされている。
- などがあげられる。

毎年8月1日より五日間 京都清水寺の大西良慶氏が「曉天講座」を開いておられるが、それにも同じようなことがいえた。良慶氏の法話は「良慶節」と呼ばれる程で独特の節回しがある。しかし、なにぶん百五歳という高齢のため収録した声は聞きとりにくく、細かく分析できなかった。紙面の都合で省くが、興味のある人は一度聞きにいくとよいだろう。

IV 結 論

説教のおもしろさは次の点にある。

- ①型……五段法と呼ばれる話の構成
- ②口調……「棒引」「位引」「力味」「威張り」など。せり弁ともいう。節回し、抑揚をつけ、人々を涙と笑いに誘う。
- ③身ぶり手ぶり……「けさ落とし」といい、話が山場にくるとスルリとけさを落とすこと。
現代の落語界に似た風習がある。
- ④七五調の文型、対句、たとえ話など、表現上の工夫
- ⑤聴き手の態度、「受け念仏」

話芸とは長年かかって練りあげられた「はなし」の芸のことである。現代法話にはこの話芸の要素がみられなくなってきた。しかし説教は、芸能文化史にその足跡をくっきりと残している。

V 総 括

「説教」という日本人が千年以上もなれ親しんだ名称も「布教」「伝道」「法話」を多用するようになり、それでいて日常会話では相変わらず「お説教」という言葉が使われるという妙な現象が生まれてきている。今や「説教」は「説諭する（叱る、小言をいう）」という意味にしか使われなくなった。
*お経の出前、までできている今、説教はますますたれていくことだろう。しかし、一見古びた「説教」にも現代の「法話」にない尊いものが含まれているはずである。

残念ながら節談説教を伝承する人々が日本中に数人となり、聴くことが困難となった。また、資料がほとんどなく、深く追求できずに終わってしまった。

本来の意味の説教と呼べるものを聞くことができず、講談・法話で間に合わせたので、今後、機会があれば、聞いてみたいと思う。また、みなさんにも提言しよう。難しいと思われるがちなものであるが、じっと正座して仏の教えに耳をますのは、本当に身も心も洗われるような、すがすがしいものであるのだから――。

日本の伝統芸が、また、すたれていくことを、残念に思う。

★ 参考文献

・説教の歴史／関山和夫 岩波新書

・学芸百科事典 旺文社